

## 国際日本学科におけるオンライン海外日本語教育実習 —台湾・ベトナム・韓国それぞれの実習の試み—

Overseas Japanese Teaching Practicums via Online  
in the Department of International Japanese Studies:  
The Cases of Taiwan, Vietnam, and Korea

宮本真有      近藤行人      坂本 正  
Mayu MIYAMOTO    Yukihiro KONDO    Tadashi SAKAMOTO

### 1. はじめに

国際日本学科では、将来日本語教育者を目指している学生のために日本語教育実習を海外3ヶ所、国内2ヶ所で実施している。海外3ヶ所は、銘傳大学(台湾)、ハノイ国家大学外国語大学(ベトナム)、そして、釜山外国語大学校(韓国)で、国内2ヶ所は、本学国際日本語教育インスティテュートと名古屋市内にある日本語学校I.C.NAGOYAである。

この日本語教育実習に参加するためには、3・4年次学生で異文化に適応しようとする意欲があり、積極的に外国人学習者と交流する意欲があること、また、全日程に問題なく参加できる健康状態であること以外に、所定の科目を履修済み、または履修中でなければならない。2022年3月現在では、「言語教育概論」「日本語教育方法論」「日本語教授法」「教室活動」「日本語教育教材論」「日本語教育文法1」「日本語教育文法2」の単位を取得済、または、履修中であることが実習申込の前提条件となっている。受講生は、「日本語教育実習指導」(1単位)を事前に履修し、その後、「日本語教育実習(海外)」(1単位)に参加する。この実習は、「日本語教育主専攻」または、「日本語教育副専攻」を認定するための要件にもなっている。

本来であれば、それぞれ台湾、ベトナム、そして、韓国に実際に行き、現

地で2週間の日本語教育実習を行うことになっていたが、2021年度は、コロナ禍のために行くことができず、オンラインで日本語教育実習を行った。本稿は海外3ヶ所におけるオンライン日本語教育実習について、それぞれ宮本（台湾実習）、近藤（ベトナム実習）、坂本（韓国実習）が報告する。

## 2. 銘傳大学（台湾）

銘傳大学は、台湾の台北、桃園、金門、馬祖の4ヶ所にキャンパスを持つ、総合大学である。特に国際化に力を入れており、外国人留学生の数が多く、留学生に対するサポートや対応が非常に丁寧なところが魅力だ。銘傳大学と名古屋外国語大学との交流協定は2013年に締結し、以来毎年約5名を教育実習生として受け入れていただいている。例年3月上旬に2週間、応用日語学科のある桃園キャンパスに赴き、現地の教員の指導を受けながら教案の作成や教壇実習をおこなう。また教壇実習の経験を積むだけでなく、台湾と日本の学生の交流を深めることも大切にしてきた。2018年度までは現地で実習をおこなっていたが、2019年度は新型コロナウイルスの影響により、実習の実施自体を断念せざるを得なかった。しかし、「台湾と日本の学生の絆を途切れさせてはならない」という両学の担当教員の強い想いにより、その翌年の2020年度にはオンライン実習という形で再開し、2021年度もオンライン形式で実習を継続している。本章では、過去2年間に実施した、銘傳大学でのオンライン日本語教育実習について報告する。

### 2.1 事前研修

事前研修は、1月の後半から2月末日までの約1ヶ月をかけ、15コマ（1コマ90分）おこなった。実習に参加した学生のほとんどが初めて教案を作成するという点であったため、初めに、なぜ教案を書くのか、教案作成にはどのような情報や準備が必要かを丁寧に指導した。また、実習の前半では銘傳大学の大学院生による中国語講座を3コマ実施していただいた。これは毎年おこなっているものではあるが、現地を訪れることができないオンライン実習では、台湾という国や実習校についての理解、そして学習者の目線に立つ

で考えるという面でより一層重要な意味を持ったようだ。

銘傳大学応用日語学科では、学科独自に編纂した『新實用日本語Ⅰ』（2006年）、『新實用日本語Ⅱ』（2005年）、『新實用日本語Ⅲ』（2006年）の教科書を使用している。そのため、まずは教科書全体、及び教育実習の担当課について分析し、その担当課で使われる文法項目の理解を深めた上で、教案の作成に臨んだ。実習期間に行う教壇実習は2回だが、事前研修ではまずは1回目の教壇実習に向けて教案を1つ完成させることを目標に、何度も推敲しながら作業を進めた。事前研修の最後には、本番と同じ環境で50分間の模擬教壇実習をおこない、その後フィードバックをもとに更なる修正を加え、研修を終えた。

今回の事前研修で一番大変だったことは、機材の準備と設置である。銘傳大学の教員との協議の結果、オンライン実習の形式は「できるだけ対面に近い形」を目指すこととなった。これは、教室という空間で学ぶ一体感を大切にすること、そして実際の日本語教育の現場に近い形で授業をする経験を提供するという、実習生への配慮を反映させている。具体的には、日本と台湾それぞれの場所から両大学の教室をZoomで繋ぎ、名外大の実習生が教壇前で教えている様子をウェブカメラで撮影し、その映像が銘傳大学の教室前方にプロジェクターで映し出され、実習生側からは教壇の対面に設置したテレビ画面で銘傳大学の教室にいる受講生たちの姿が見えるような形で、擬似教室



図1 台湾実習で使用した機材とその配置

を実現した(図1)。この環境を整えるためには、テレビ2台、パソコン2台、ウェブカメラ、三脚、外付けマイクスピーカーなどの機材が必要となり、実習生はその接続や設定・設置も行わなければならない。そのため練習を重ね、実習生1人でも準備が行えるようにした状態で本番に臨んだ。また、Zoom越しに教えるという環境では、工夫しなければならない点多々あり、それに応じた指示の方法や教案の変更も求められた。実習生たちは、それぞれの気づきをもとに新たな環境に適応すべく試行錯誤しながら、授業準備に取り組んだ。

## 2.2 オンライン実習

例年台湾実習では実習生を5名まで募って選考を行うが、オンライン実習では募集人数を3名までに絞って選考をおこなった。結果として2名の実習生が参加することとなり、3月第2週の月曜から第3週の金曜までの12日間、オンラインで教育実習を実施した。実習期間の前週には、機材の設置やZoomの接続確認も兼ね、指導教員と実習生そして両大学の学科長を含めた顔合わせ会をおこなった。実習期間中はGoogle Classroom上で資料の提示や課題の提出をおこない、教案指導をしていただく銘傳大学の先生方には、実習生とそれぞれ個別にEmailやZoom、LINEなどを介してご指導をいただいた。また、実習生は教壇実習の前に、実習を行う初級クラスと中級クラスの学生を対象に、Zoomでの交流会を2回実施した。

実習期間が始まると、実習生はまず銘傳大学の先生方による会話授業の録画ビデオ(初級の授業2コマ、中級の授業2コマ、1コマは50分)を視聴し、レポート課題に取り組んだ。後日そのレポートを元に、筆者と実習生とで教案の改善や教壇実習で気をつけるべき点などについて話し合った。その後実習生はそれぞれの指導教員の指導を受けながら教案を書き上げ、第1週目に日本語の初級会話クラスにて1回目の教壇実習をおこなった。ここでは『新實用日本語Ⅰ』の第15課を担当し、「～がほしいです。」「～たいです。」「(場所)へ(動詞)に行きます。」などの文型を取り扱った。第2週目には、中級会話クラスにて2回目の教壇実習をおこなった。ここでは『新實用日本語Ⅲ』

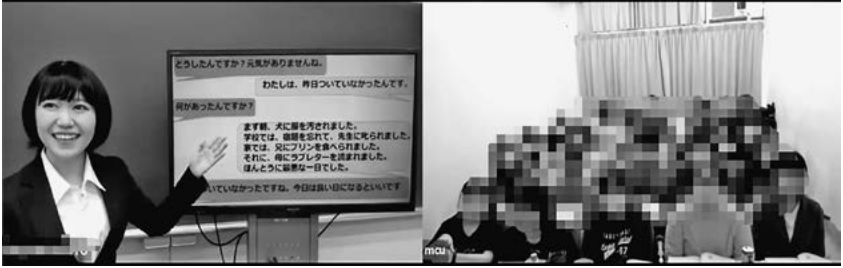


図2 オンライン実習の様子（台湾）

の第5課の、受け身を使った会話練習を担当した。1回目は大変緊張した様子の実習生たちだったが、友好的な銘傳大学の学生たちに助けられ、2回目にはリラックスした状態で臨むことができ、授業を楽しむことができたようだ。特に、教材として使用するPPTやハンドアウト以外にも、実際に犬に噛まれたスリッパや指さし棒などの小道具を用意したり、学習者の発話から自然に雑談に発展させたりと、実習生個々による工夫が見られたことが印象に残っている。図2は、実習の様子を撮影したものである<sup>1)</sup>。

教壇実習本番は授業の運営に加え、機材の準備・設置・接続も全て実習生がおこなったが、事前研修で練習をしておいたため、手際良く進めることができた。本番の様子は毎回Zoomで録画し、事後すぐに学生に共有してその場で振り返りディスカッションをおこなった。さらに指導教員から個別でフィードバックをもらう機会もあり、それらをもとに改善点などをまとめ、課題として提出した。

### 2.3 実習の成果

実際に現地を訪れての実習ができなかったことは残念であったが、オンライン形式であっても、実習としての教育効果は十分得られたのではないかと感じている。実習生たちは、特に2回目の教壇実習で担当した文法項目が難しく、学習者にわかりやすく説明する方法や、導入や例文で使用する状況を考えるのに大変苦労したと話していた。授業をゼロから組み立てていく過程で、自身の日本語に対する理解を疑い、再度日本語の文法や使用について学

び直す姿勢が見られたことは、本実習の一つの成果だといえよう。また、オンラインという環境で効果的に授業を運営していくためにどのような工夫が必要かを、実習生自身で考え、実践することができたことも評価したい。例えば、学習者を指名する際はくじ引き形式で名前が書かれた紙を提示したり、接続の問題で学習者の発話が聞き取れなかった際、相手を傷つけずに発話を繰り返してもらうにはどのような声かけをすべきかを考えるなど、細部にまで配慮する努力が見られた。

もう一つの成果としては、オンライン実習を実現するためのさまざまな機材やツールを使えるようになったことが挙げられる。例えば実習生のうちの一人は、普段はスマートフォンかタブレットしか使っていないため、パソコンやその他の機器については今回の実習を通して使い方を学んだようだ。また、他の学生もテレビにパソコンを接続してモニターとして使用方法や、Zoomの接続や設定方法、外付けウェブカメラやスピーカーの接続・設定など、機器の操作についての技術も身につけることができたようだ。このような機器に関する知識は、今後現場や社会に出た際に役に立つ場面があるだろう。

最後に、台湾の学生と日本の実習生の交流について言及したい。前述した通り、実習生たちは教壇実習の前に、実習クラスの学生と初級・中級に分けて2回の交流会をおこなった。後から聞いた話によると、台湾の学生たちはとても積極的で会話が盛り上がり、中には元々1時間の予定が3時間にも及んだ回もあったようだ。さらには、この交流会がきっかけで台湾の学生と友達になり、実習が終わっても個人的に連絡を取り合っている人もいると聞いた。異文化間コミュニケーションという側面でも、このような成果が見られた。

## 2.4 報告書作成

実習終了後、実習生と全体の振り返りの時間を設け、実習を通して学んだことや改善点、日本語教育についての考え方や、次年度の実習の運営に関する反省点などについて話し合った。その後、実習の集大成としての報告書作りを開始した。報告書には、教育実習の概要、授業見学の報告、教壇実習の報

告や使用した教案や教材、そして実習全体の振り返りを掲載している。この報告書は、実習に携わった銘傳大学の先生方や実習生、学科の教員に一冊ずつ配布する他、次年度の実習の事前研修での参考資料としても使用される。

### 3. ハノイ国家大学外国語大学（ベトナム）

ハノイ日本語教育実習はハノイ国家大学外国語大学と名古屋外国語大学の間に取り交わされた2010年の協定に基づき、2011年度に第1回の日本語教育実習が行われた。2018年度は諸般の事情により開講ができず、また、2019年度はコロナ禍のため、事前研修を実施したものの、渡航は中止となってしまった。2020年度にはオンライン実習というかたちで再開することができ、現在12回の実績がある。毎年5名を上限とした実習生がハノイの地に赴き、2週間程度の期間で授業見学、教案作成、教壇実習、現地学生との交流を行っている。実習前には15コマの事前指導が、実習後には反省会及び報告書作成が行われ、それぞれ2単位が与えられる。この実習を経験した実習生がハノイ国家大学外国語大学で日本語講師として勤務するなど、実習生に数多くの機会を与えてきた。本章では、2021年度に行われたオンラインによる日本語教育実習についてその内容を報告する。

#### 3.1 事前研修

ハノイ実習でもほかの実習と同様、15コマの事前研修が行われる。ハノイの事前研修は全15回を以下のように構成した。

- ・教育観の明確化と実現したい授業（全2回）
- ・オンライン日本語教育（全4回）
- ・教材分析（全2回）
- ・教案作成（全4回）
- ・模擬授業とその振り返り（全3回）

2021年度は昨年に引き続き、コロナ禍以前よりICTによる日本語教育の実践を重ねてきたセントラルジャパン日本語学校の柏谷涼介講師を招き、理論的背景を含めたオンライン授業の実施についての講義を取り入れた。ICTと

親和性のある学習理論と結びつけながら、ブレンデッドラーニング、反転授業、CSCL（Computer Supported Collaborative Learning）等の学習形態が紹介された。また、「オンラインだからこそ可能になること」として、学習者がことばの意味を考え、ことばをどのように使えばいいのかを考えた教室活動を実施するため、ICTを活用した事例が紹介された。

また、実習で使用可能な様々なオンラインサービスが紹介された。クイズをクラス活動として取り上げるために使用可能なKahoot、オンライン上でのドリルやクイズを実施するためのQuizletやANKI、教育用動画作成のためのFlipgridやまた、共同作業に利用されているPadletやJamboardなどである。また、オンライン上で教材作成をするにあたり、著作権に配慮した画像検索についても言及された。これらのオンラインサービスの紹介はサービスの名前と機能の紹介にとどまったが、いざ使用する際にどんなサービスがあり、どのように利用できるかを調べて利用可能になるように意図されたものである。

次に、実習生はハノイの日本語教育実習で使用する実際の教材について各自で分析し、授業全体の構成を考えながら、教案作成に取り掛かり、模擬授業につなげた。今回参加した実習生は1名を除いて、実際に自分で実施する授業をつくり上げるための教案作成は初めてであった。実習生は自らの思い描く日本語の授業を実現すべく、準備を進めた。事前研修では文法の授業を取り上げて模擬授業を実施したが、授業内容もさることながら、指示の出し方、教師自身が楽しむことの重要性、学習者としての戸惑いなどについて実感し、すぐに始まる実習へ期待と不安を感じながら事前研修を終えた。

### 3.2 オンライン実習

ハノイにおけるオンライン実習は、PlatformとしてGoogle Classroomを使用し、実際の授業はオンライン双方向テレビ会議システムであるZoomを使用して行った。Zoomを通じ、実習生はオンラインで日本から参加し、ハノイの学習者は、各自の通信デバイスから個別に授業に参加した。

2021年度の実習は2022年2月28日～3月11日の日程で行われ、実習生は5



名（本学の日本語教育プログラム（主専攻及び副専攻）において実習を履修するための要件を満たしたもの）であった。

#### 2月28日：説明会

説明会では、ハノイ国家大学外国語大学日本語文化学部のNga My学部長から挨拶をいただき、研修全体の担当をしてくださるNguyen Trang先生より研修全体について説明いただいた。

#### 2月28日／3月1日：授業見学

実習生が実際に授業を担当する前に、2日間にわたって、1コマ50分の授業を8コマ見学させてもらった。実習生からは、「ベトナムの先生は様々なオンラインツールを駆使して授業を展開されていました。」といったように、ベトナムでのオンライン授業の実際をみることで、実際に行う授業アイデアを膨らませていた。

#### 3月2日～10日：教壇実習

担当する授業は、初級文法クラス1コマ、会話クラス（初級クラスか中級クラス）1コマ、読解クラス（初級クラスか中級クラス）1コマ、作文に対するフィードバッククラスであり、各自が4つの授業を担当した。

授業前には、作成した教案および教材をハノイ国家大学外国語大学の日本語講師の担当者に見せて相談し、授業後には講師から授業へのフィードバックを受けた。

実習生は、この教壇実習について一様に、大変だったが楽しかったと振り返っていた。同時に、「学習者からの予想外のリアクションにうろたえてしまい、一人ひとりにきちんと対応することができませんでした。（実習生A）」「とても収穫のある2週間だったと思います（実習生D）」のように難しさも感じたと振り返っている。オンラインではあるものの、実際に学生から返ってくる反応から得られた学びであろう。

#### 3月10日：交流会

ハノイ国家大学の学生と実習生の交流を目的として、それぞれが関心のある話題についてのプレゼンテーションを実施し、意見交換が行われた。実習生は、ファストファッションについてのプレゼンテーションを作成し、その

後、ハノイの学生たちがどんどこで服を買っているのか、日本やベトナムにあるブランドなど、それぞれの事情についての話に発展した。実習生と学習者という立場から解放され、同世代の仲間として交流を深めていた。

3月11日：修了式

修了式では、実習の担当である Trang Nguyen 先生および My Vũ 先生から約2週間の実習について総括を受けた。学生たちには大変な授業準備と実施について労いの言葉とともに、様々なオンラインツールを利用して授業を実施したことについて評価を受けた。参加した実習生5名にはハノイ国家大学外国語大学言語文化学部より修了証が発行された。

また、実習生の授業を受けたハノイ国家大学外国語大学の学生から、実施したクラスに対する声や実習生についての声を集めた動画が贈られた。この動画からは現地の学生たちが実習生らの授業を楽しんでいたことなど、実習生への温かいメッセージが伝えられた。最後に、Nga My 学部長から、来年こそはベトナムで対面での教育実習が実現させたいこと、今回の実習が無事に終わり、両学の交流が今後も活発に続いていくことを祈念するとの言葉をいただいた。

### 3.3 実習の成果

オンラインでの日本語教育実習で実習生は、機器の使い方、様々なオンラインサービスの活用、教案をPPTスライドに落とし込み、Zoomで操作しながら授業を進行すること、現地の教員や学生とのコミュニケーションなど、数々の貴重な経験を得た。とりわけ、実際の教壇実習で実習生は、学生の反応から授業への改善に関する課題を見つけたり、自身のこれまでの準備への反省点を見出したりしていた。様々なタイプの授業を経験したことは実習生にとって大きな成果となったといえる。

また、オンラインでの実習は実習生が、オンラインツールを用いて授業目標を達成するための活動を実現することの重要性を学ぶ機会となった。オンラインでのクラス運営は、対面の授業以上にプログラミング的な思考が必要とされ、授業全体の流れを構成し、事前にスモールステップを用意しておく

必要がある。オンラインという環境の中で、自分たちが学習者と一緒を実現したい学習活動とは何か、そしてこれをどのように実現するかを考え続けた実習となったのではないだろうか。

今後の日本語教育にとって、オンライン等の形態がなくなることは考えにくく、対面授業の再開以降もオンラインの強みを生かした日本語教育を実践する能力が求められている。実習生の実践したいことを授業にどのように反映していくのか、そしてそれを実現するためにICTスキルを活用していくことができるような支援が必要となるだろう。

### 3.4 報告書の作成

実習終了後に振り返りの時間を設け、実習全体について振り返った。実現したいと考えていた授業と実際にやってみた授業との違い、苦労、不安、反省が共有された。その後、すべての実習で作成されている報告書の作成にかかった。報告書には、現地の教員や実習生同士の授業見学をしたことに対する〈授業見学報告〉、実際に自分が行った授業を振り返ってまとめた〈教壇実習報告〉、実際に行った授業の〈教案〉などを掲載する。出来上がった報告書は、実習生やこれまでに実習に関わった教員、お世話になったハノイ国家大学外国語大学などに郵送した。

## 4. 釜山外国語大学校（韓国）

韓国釜山市にある釜山外国語大学校における日本語教育実習は、名古屋外国語大学、京都外国語大学、お茶の水女子大学、そして、近畿大学の4大学が合同で参加している実習で、非常にユニークなものである。筆者は2018年から釜山外国語大学校の実習の引率を担当しているが、この釜山外国語大学校は、初級、並びに、中級の日本語の授業において日本語の教科書を使っていない。CEFR(Common European Framework of Reference for Languages、ヨーロッパ言語共通参照枠)に基づき、釜山外国語大学校が独自に開発した「Cando シラバス」に従った「総合日本語授業」という科目が2014年に設置され、文法積み上げ式の授業ではなく課題達成型の授業が行われている。2021年度

は、6名の学生の参加があったが、これまで教科書を使って日本語を教えるという状況の下で、いろいろな日本語教育に関する科目を履修し、研鑽を積んできた参加学生にとっては本当にショックを覚えるくらいの衝撃ではなからうか。使用している教科書に沿って、そこに出ているものを導入して、教えればいいという発想が根底から覆るのである。「Can-do シラバス」ということで、「～ができるようになる」という目標のもとで、各自で教材を作り、導入する文型や語句を選択して、何も無いところから補助教材や教案などを作っていかなければいけない。

実習期間中は、釜山外国語大学の日本語の先生がそれぞれの実習生の指導担当教員になり、先生方の実際の授業にオンラインで参加させていただいたり、状況設定、文型導入、語彙導入、授業の流れ、パワポ作成、配布資料作成、宿題、イラスト、写真などのオンラインによる個別指導がある。指導担当教員1名に対して、実習生が1名ないし2名付き、かなり懇切丁寧な指導がなされる。

#### 4.1 事前研修

事前研修は、15コマ行われる。うち4コマ半は、学内の韓国語の教員による初級韓国語の集中授業である。残りの10コマほどは、自己紹介パワポ作成、CEFRのCan-do Statements(能力記述文)、これだけは知っておきたい基礎日本語教育文法、これまでのオンライン授業のビデオ動画視聴とコメント、教案作成練習、教材作成、模擬授業とフィードバック、釜山外国語大学校における「Can-do シラバス」などが中心である。この中で特に力を入れて解説したのは、釜山外国語大学校における「Can-do シラバス」である。実習を行う学生が担当するクラスは、主に初級レベル、または、中級レベルの日本語クラスであることが多いが、それらは釜山外国語大学校でいうA1、A2、B1、B2のクラスに相当する。各レベルは、「理解」「やりとり」「表現」の3つに分かれていて、「理解」は「読む」と「聞く」、「やりとり」は「会話」、そして、「表現」は「話す」と「書く」に大まかに分けられる。学習者はこれらの技能をバランスよく身に付けながら、「～をすることができる」という目標をクリ

アすることになる。

## 4.2 オンライン実習

釜山外国語大学の日本語教育の特徴の一つは、12のトピックを設定し、各レベルでその12のトピックをカバーし、スパイラルに日本語教育を初級から中級まで進めていくところである。12のトピックは、「自分と身近な人々」「住まいと住環境」「からだと健康」「食生活」「旅行と交通」「自然と環境」「仕事と職業」「買い物」「文化」「地域社会と世界」「趣味と余暇」「学校と教育」である。毎週一つのトピックをカバーし、12週で終わるようである。実習生は一つのトピックを選び、実習2週目に50分の授業を4コマ教える。

実習指導担当教員の指導は、実習が始まる2週間ほど前から実質的に始まる。実習生にとっては自分の指導担当教員にモニターを通して接し、その教員の日本語教育に関する考え方や担当するクラスの授業内容、学生などの様子に触れることで、自然と実習モードに気持ちが切り替わる。

実習1週目は、指導担当教員の授業参観と授業準備に焦点をおいた毎日になる。授業参観を通して、翌週に教えることになる学習者の日本語のレベルがどの程度のものかをまず知る。どのようなスピードで話せば、どのような語彙を使えば、どのような漢字であれば、学習者がわかってくれるのか、などの大体の感触を得る絶好の機会になる。実習2週目は、これらを基にして、実際に教える教案作成に入る。実習生が作成した教案を見て、指導担当教員は、状況の設定、語彙の選択、文法の導入と説明の仕方、導入文型の練習の方法、どのような補助教材が必要になるか等、学習者の視点から様々な有益なコメント、フィードバックを行う。実習生は、それらを考慮して、授業で用いる最終教案作成に向かう。さらに、実習の前日に、一度指導担当教員の前で、模擬授業を行い、最終コメント、フィードバックを受け、実習に臨む。オンライン実習風景は、全て録画録音し、実習後の振り返りや報告書作成の際の資料となる。実習前の2週間、実習期間の2週間、計4週間に渡り、丁寧な指導が行われる。

### 4.3 実習後の活動、振り返り

実習後の活動としては、実習直後に指導担当教員からの口頭によるコメント、フィードバックをもらう。引率教員がオンライン実習に参加できている場合は引率教員からのコメント、フィードバックも行われる。その後、実習生は録画録音したものを自分の目で客観的に見て、どういう点がうまくいって、どういうところがうまくいかなかったか、どうしてうまくいったのか、またどうしてうまくいかなかったのかなどの振り返りを行い、うまくいかなかった点は、どうしたらうまくいくかなどの改善案を考える。指導担当教員ならびに引率教員からのコメント、フィードバックなども取り入れて、再度、より良い指導案を作成する。

### 4.4 実習の成果

コロナ禍で対面実習が叶わないという状況から、オンライン実習になったが、機器の扱い方に始まり、オンラインで使える Padlet などのアプリの習得、教案の作成、補助教材の作成、実際の実習授業、学習者とのやりとり、宿題や小テストの採点、コメントの付け方などまで一通り経験できたことは、大きな実習の成果である。また、海外で実際に教えておられる先生方から直接指導を受けられたこともとても刺激になったと思われる。

以下、報告書から実習の成果だと思われるものをいくつか抜粋してみる。「学習者のレベルに沿った授業を進める難しさや時間配分などの難しさがわかった」「日本語教師としてのやりがいを感じる事ができた」「学習者がいてこそその教師だということに気づいた」「日本語を教えるだけでなく、オンラインでの教育の“術”も学ぶ事ができた」「日本語教師についての考え方が大きく変わった」「教えるという立場に立つことがいかに大変であるかがわかった」「教師を悩ませるのも学習者だが、教師を救うのも学習者である」「学習者のために役に立つ、楽しい授業が出来るように、いろいろなことにチャレンジすることの大切さを学んだ」「どんな経験でも日本語教師という職業にとって無駄にならない」「怒涛の2週間のオンライン実習だったが、確実に自分の成長につながったと確信できる」「日本語教師というのは教えるだ

けではないということに気づいた」「教師は学習者の学びに責任を持つこと、また、その責任の重さを何よりも強く感じた」「学習者の学びに真剣に向かい合うことが大切である」「授業の前に文法説明の動画を作成し、それを学習者に見てもらい、実際の授業では活動をメインに行うという反転授業にも挑戦した」「授業は学習者に教師の力量を示すものではないということを学んだ」「これから自分がどんな日本語教師を目指すのかということを考えるきっかけになった」など一人一人様々な学びがあり、実習の成果が窺える。

#### 4.5 報告書作成

実習の翌週に実習生を集め、実習の感想、振り返りを全員で情報共有し、その後、報告書作成の説明を行う。報告書には、〈オンライン日本語教育実習を体験して〉、改善した〈教壇実習の教案〉などを掲載する。報告書にあたり、報告書表紙デザイン&目次作成係、報告書誤字脱字チェック係、報告書編集係などの分担を決め、12月上旬の報告書完成を目指す。出来上がった報告書は、実習生に1冊、国際日本学科の教員に1冊、お世話になった釜山外国語大学の先生方に15冊郵送し、残ったものは、翌年の実習参加者の参考としたりオープンキャンパスなどの展示用にしたりして、いろいろなイベントで活用される。

### 5. まとめ

以上、銘傳大学(台湾)、ハノイ国家大学外国語大学(ベトナム)、そして、釜山外国語大学(韓国)でのオンライン日本語教育実習について報告した。海外と一口に言っても、それぞれの機関で、様々な実習が展開されていることがよくわかる。日本語教育実習は、教師が教え、学習者が学ぶというような一方的な学びではなく、教える側の教師にとってもいろいろなことを学ぶ機会になっている。そう考えると、日本語教育実習というよりは、共に学ぶという点で、日本語共育実習と言ったほうが適切な言い方かもしれない。

アフターコロナの日本語教育現場においても、オンライン・対面・ハイブリットを含めた学習形態の多様化が進んでいくと考えられる。今後は、現地

に行って行う教壇実習であっても、オンラインで行う実習であっても、実習に参加する実習生が「学習者が多様なリソースを活用できる教育実践を行う能力（文化庁国語審議会2019）」を身につけられるような指導体制をさらに強化していきたい。

## 注

<sup>1</sup> 図1・図2の写真の使用について、実習生本人から掲載許可を得ている。

## 参考文献

文化庁国語審議会（2019）『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改訂版』